

奥大山の秘境を訪ねて

竹下 忠

シニア自然大学校環境科恒例の一泊研修で、サントリー天然水の森奥大山工場を見学することになり、11月1日午前8時03分、貸切バスは梅田を出発した。

昨夜、雨が降ったのか家を出るとき路面がぬれていたが、空を覆う雲は朝焼けて一部青空がのぞき、ケヤキは少し紅葉を始めたが御堂筋のイチョウはまだ青々としている。

中国山地に入ると黒い雨雲が空を覆い、蒜山高原では雨が降り出し、雨に煙る大山を右に見ながらスカイラインを走る。

大山は、ここ一週間が一番紅葉の華やいだ季節といい、スカイラインに沿った林の灌木は黄葉し、風に吹かれて落葉が舞っている。

11:26分、鳥取県江府町御机にある鏡ヶ成園地の奥大山休暇村に到着する。標高930mの園地は広大な草原で、ロッジやレストラン、キャンプ場などの施設があり、主峰大山に連なる外輪山の烏ヶ山からすがせん(1448m)が眺められ、シニア自然大学校15期修了生の佐野さんと現地ガイドの河合さん、西村さんの紹介があり、佐野さんが、「今日は、西高東低の気圧配置が強まって上空に寒気が流れ込み、この秋一番の冷え込みとなり、この地方は雨、ところにより雷雨、夜は雪といった天候で、晴の日、雨の日が交互に繰り返し、大山は冬に向かって準備が始まっている」と言う。

佐野さんは、茨木市に住み、森林保全活動をしており、サントリーに勤めていた関係で奥大山の森の案内人もしているといい、佐野さんのお世話でサントリー天然水の森奥大山工場の見学をさせてもらうことになった。

雨のためバスの中で昼食を済ませ、佐野さんたちガイド3人を乗せて貸切バスはサントリーブナの森に向かう。

スカイラインのセンターラインが分水嶺といい、しとしと、時に激しく降る雨は、右は太平洋に、左は日本海に注ぐと言う。

「鏡ヶ成ふれあいの森」は、国立公園の一部をサントリーが自然水の森として環境省と契約したもので、植物採取は禁止され、部外者は立ち入り禁止で、入場者制限用ゲートから落葉積もる「サントリー自然水の森」に踏み入り、自然観察会が始まった。

森がざわめいている。標高970mのブナやミズナラの群生林で、林全体が薄い黄色に染まり、林床には「根曲がり笹」とも言われるチシマザサが生い茂り、激しく風に揺れている。チシマザサの筍は食用になり、笹は60～70年に1度花を咲かせて枯死するという。

ミズナラの高木にツタウルシがからみつき、真っ赤な葉っぱが美しいが、「ツタウルシは危険植物で、葉を伝った水滴が手や顔にかかっただけでもかぶれる」と佐野さんは言う。

カラマツの境界林がある。満州から引き揚げてきた人たちの開拓部落があったところで、ダイコンなどが栽培されていたといい、2～3mの積雪地帯で防風林として造られた。

樹間から標高1477mの烏ヶ山と1729mの大山が遠望できる。大山の初冠雪はいつもこの時期で、「寒い日に陽が出ると雪になる」と佐野さんは言う。

明治時代の帝国陸軍の軍馬飼育場の囲いとして造られた名残りの土塁を歩く。ブナの倒木が横たわり、去年倒れたものでサルノコシカケが生え、50m四方の大きな空間(ギャップ)に小さなカエデの幼木(3～5cmの未生)が生えている。タラノキなどもこうした所に生えてくるパイオニア植物という。

去年はブナが大豊作で、絨毯を敷き詰めたように実が5cmも積もったといい、落ちてい
るブナの実を初めて見たが、実はソバの実のように角ばって固く、カロリーが高いのでピ
ールのつまみに最高といい、去年は、熊が好物のブナの実を求めて3頭も現れたと言う。

ブナは、笹より高くなれば生き残れるがそれまでに20年かかり、花を付けるまで50年、
実がなるまで70年かかり、生き残りのための戦略として5年に1度結実するという。

以前どこかの自然観察会で、「ブナが豊作になるとネズミが異常発生し、ブナが凶作に
なるとネズミは減る。ネズミが元の数に戻ったところで、ブナは大量の実を成らせてネズミに
種を遠くまで運ばせる。ネズミはブナの実を土中に埋めて保存するが、埋めたところを忘れ、
生き残ったブナの種は土中で冬を過ごし春に芽吹く」という話を聞いたことがある。

ブナの倒木や立ち枯れに、アワビの貝殻のような形をした黒い色のツキヨタケが生えて
いる。夜見ると青く見え、カメラに撮ると青く映り、神秘的だが毒性が強くて食べられない。

黒い地層が露出している。^{だいせんくろぼく}大山黒土という火山灰土で、私の故郷では「黒ぶく」と言っ
ていたが、通気性、排水性、保水性が良いため作物の栽培に適し、酸性土にブルーベリ
ーが合い、奥大山には10haの広大な畑で、17,000本のブルーベリーを栽培する日本最
大規模の農園があると言う。

ショウジョウバカマが群生する斜面を下る。チゴユリが黒い実を付け、林の中に赤や黄
色に染まるカエデの仲間がいろいろ見られる。

コミネカエデ、ハウチワカエデ、コハウチワカエデは赤く染まり、イタヤカエデは亜種、
変種と種類が多く日本だけでも7種あるが黄葉する。ウリハダカエデは、樹皮がマクワウリ
に似ていることからその名が付き、葉は10～15cmとカエデの中では大きく、秋には黄色
から赤褐色に染まるという。

杉の植林に薄黄色に染まった落葉低木がたくさん生えている。森の中で見ると白っぽい葉っぱのようにも見え、以前から何という木か気になっていたのだが、コシアブラと言ひ、掌状複葉5枚の小葉からなり、枯れると網の目レースになり、よく栞に使われたりし、新芽は食用になり天ぷらにすると美味しいと言う。

カラマツ林があり、人工林を自然林に還す活動が行われており、木を伐った後にコシアブラやクロモジが生えてきている。

昔、伯備線が敷設されたとき、枕木にするため木が伐られ、また、牛馬を飼うために森が切り開かれて巨木の森がなくなり、そのうえ、50年前にエネルギー革命がおこり、薪炭から化石燃料に変わり、さらに外材の輸入などで人間が山に入らなくなった。佐野さんは森のパトロールをしているが、木を伐らないと森は良くならないと言ひ、今、全国の森が放棄されて荒れていると嘆く。

巨木のコーナーには、森の女王と呼ばれる樹齢400年、幹周り5~6mにも及ぶミズナラの大木があり、大山でベスト3に入るといふ。ほかにブナ、ホウ、ミズメ、ウズミザクラ、クヌギなどの巨木が見られるが、チシマザサが生い茂っているため苗木の生育を阻んで後継樹が育たず、古い薪炭林の放置場所ではクヌギやミズナラの大木化が始まっていると言ひ。

「サントリー水の森」の絶景ポイントは、深い谷になっており、正面向こうの斜面には真っ赤に燃えたハウチワカエデが見られる。森の水が集まる源流の源流で、断崖下に森の水が流れ出す沢の音が聞こえ、近くには日野川水系の「本谷溪谷」があり、イワナが棲んでいるという。

お昼からは天気が回復し、青空も見られる。サントリー天然水の森奥大山工場の見学となり、オーバーシューズを付けて工場に入る。

環境に優しい工場とのふれこみで、8haの構内に生産棟、倉庫棟があり、生物多様性緑化といふて、外来種や地区外の植生を排し、大山に自生する木で構内緑化が行なわれ、大山の自然との調和が図られている。

工場案内のビデオが流れる。サントリー天然水の森奥大山工場は、烏ヶ山の南麓(標高1000m)江府町御机にあり、大山の南麓から岡山県との県境に至る奥大山の広大なブナの森約359haで、水源涵養機能を高める森林整備活動を展開している。

奥大山工場は、山梨県の白洲、熊本県の阿蘇に次ぐサントリー第3の工場で、豊かなブナの森に育まれた地下水を医薬品を製造する環境と同じ無菌環境でボトリングし、安全安心な製品づくりを行なっている。

大山隠岐国立公園の中央にそびえる中国山地最高峰(1709m)の大山は、100 万年も前に形成された成層火山で、大山に降った雨や雪がブナの森に蓄えられ、2 万 5 千年前の噴火で成長した溶岩ドームの火成岩(黒雲母や角閃石^{かくせんせき})の地層の地中深くに浸透し、ミネラル分を含んだ天然水へと磨かれ、ペットボトルの製造からボトリングまでオートメーション化され、1 分間に2 ボトルは30 本、500ml のボトルは 600 本を製造しているという。

「サントリー天然水奥大山」とフランスのミネラルウォーター「ヴィッテル」の飲み比べをしたが、水に含まれるカルシウムとマグネシウムの量が 120 以上のものを硬水、120 以下のものは軟水と言い、日本は火成岩、欧米は堆積岩の地層の違いがあって、フランス製の「ヴィッテル」は硬度 315 の硬水で味は淡白、奥大山の水は硬度 20 の軟水で、口当たりが柔らかく感じられた。

軟水は、石鹸や洗剤の泡立ちが良く、コーヒーの香りや和風料理の味を引き立て、硬水は、肉料理やウイスキーの水割りに適しているが、ご飯を炊くとばさばさになると言う。

サントリー奥大山工場周辺は、冬には2 ~ 3m もの積雪があり、その冷たいエネルギーを夏場の空調や生産設備の冷却源に利用する雪の貯蔵施設「雪室」を見学したが、断熱材が施された室の中には 250 トンの雪を保存することが出来、雪の冷気で2 といい、ガイド嬢は防寒着を着ていたが、私はうかつにも上着を脱いでいたため風邪が治りかけていたのにまたぶり返してしまった。

奥大山休暇村に向かう。佐野さんは、「今夜は雪になる。積雪が多いのでスカイラインは 12 月中旬から 3 月まで閉ざされる」と言う。

バスは、黄葉の美しいブナ林帯を走る。ところどころに鮮やかなカエデの紅葉があり、目を引く。自衛隊が造営した道路といい、曲がりくねった県道 45 号線で、道路端に立つポールは除雪の目安のためのものと言う。

倉吉市と琴浦町の標識が続いて見え、境界を走っているのであろう。「おはよう牛乳」の看板も立っている。

赤い大きな橋がひと際目立つ。長さが 170m、高さ 45m の橋で、谷を挟む両サイドは錦織の絨毯を敷きつめたように紅葉が燃え立ち、遠く大山や日本海が望め、霞む景色の中に風力発電の白いプロペラも見え、絶景の展望スポットであるが自殺の名所とも言う。

鏡ヶ成園地で土木工事が行なわれており、木々が伐採されている。来年、めぐみの森で第 64 回植樹祭があり、天皇陛下が来ると言うが、植樹祭のために木を伐るなど滑稽というより腹立たしい思いがしてくる。

夜の宴会では、パナソニックOBの石橋さんのマジックショーがあって賑わい、班ごとの二次会で盛り上がり、ついつい飲み過ぎし前後不覚で寝入ってしまった。

2日目の朝、雨は一時止んで青空がのぞき、烏ヶ山の初冠雪を見る。鏡ヶ成園地の銀繡の林を舞台に、山陰のマッターホルンと呼ばれる烏ヶ山が薄っすらと雪化粧した姿は、凜としていて魅入られた。

8:30分、大山休暇村を出発し、佐野さんのガイドで黄葉に包まれた蒜山大山スカイラインを走り、一向平いっこうがなるに向かう。

一直線に延びるスカイラインの正面に雪を被った外輪山の甲ヶ山かぶとがせん(1338m)が見える。左右に草原が広がり、大きな牛舎が見られ、ヤマドリが飛び立つ。佐野さんの話ではイヌワシも見られると言う。

一向平は、秘境中の秘境と言われる大山滝への入口で、キャンプ場や森林体験交流センター、バーベキューハウスなどの施設があり、木造の建物のバーベキューハウスでは職人が手なれた作法でお昼のそばを打っている。

中国自然歩道の一向平・川床コースは、古来「大山の道」の中でも一番険しいルートといい、かつては倉吉・関金・赤崎方面から、地藏信仰と大山寺で行なわれていた牛馬市のために往来した道で、全国的にブナ林が減り、その危機が叫ばれている時、大休峠おおやすみ一帯のブナ林は、西日本では貴重なものになっているという。

一向平は、標高565mにあり、サンカヨウの大群落が見られ、深山の湿地に生える高さ30~70cmの多年草で、5~7月に2cmほどの白い花をつけるという。

1kmほど歩くと谷底に急降下する非常に急な階段になる。ロープにつかまりながら下るが手が冷たい。丸太の階段で雨に濡れて滑りやすく、急なところでは丸太と丸太の間が殆んどなく足を乗せるのも難渋する。蟹の横這いのようにしてドンドン下って行く。何段あるのだろう。溪谷の瀬音が下の方でかすかに聞こえる。

ブナの幹を雨水が伝って根元に流れているのが目の前で見られる。ブナは枝を大きく広げて降る雨を小さな葉っぱで受け止め、小枝を伝い幹を伝い自分の根にしっかり届ける。これを樹間流といい、ブナの落葉は硬く容易には腐らず、葉と葉の空間に水を溜める保水力があり、「自然のダム」と言われる。

急な階段の右手に大きな崩落跡がある。平成18(2006)年に崩落したため平成19(2007)年に新しいルートに付け替えられたという。それまでは崩落跡に大山古道が通っており、昔は川まで下って丸太の橋を渡ったと言う。

430段もあるという急な階段を下りきったところに、加勢蛇川かせぢに架かる大山滝吊り橋がある。昭和52(1977)年12月に竣工とあり、長さ45m、巾1m、高さ30mで結構スリルがあり、40名もの人間が一度に渡ると吊り橋は大きく揺れ、落ちはしないかと怖くなる。

吊り橋を渡ったところに「鮎返の滝」の標識がある。200m下流にあるといい、吊り橋からは見えないが、名前からすると鮎が上流に上れず引き返した位だから相当の落差があるのかと思ったら、10mばかりの滝といい、水量の多さでアユも驚いたのである。

「旦那小屋跡」とあり、怪訝に思う。説明板に砂鉄から鉄を造る仕事に携わっていた「たたら師」が住んでいたとあり、賃料の高い仕事だったのだろうか。

「たたら」とは、鉄を造り初めた頃の製鉄法で、製鉄反応に必要な空気を送り込む装置のふいごをたたらと呼んでいたといい、出雲の国名の由来は、「雲いずる」にあると言われているが、出鉄いづものから来たという説もあり、鉄は、朝鮮半島から出雲に伝わり、武器、農耕具が造られ全国に伝播し、古代出雲は、青銅器と鉄器の国で、製鉄は出雲の伝統産業になったと言う。

古事記によれば、高天原を追われたスサノオノミコトは、出雲の国に降り立ち、川上に住む老夫婦の娘を次々に食べるヤマタノオロチを退治したが、尻尾から太刀が現われ、アマテラスオオミカミに献上したという神話があり、ヤマタノオロチは「産鉄集団」の説もあり、島根県を中心にした日本海附近では「たたら」が盛かんに行なわれていたと言う。

佐野さんに促されて辺りを見ると、黒っぽい茶褐色をした重い石が転がっており、砂鉄を含んだ石で、鉄を取り除いた屑(金糞)が見つかることもあると言い、全国には金糞山とか金糞峠といった地名が見られると言う。砂鉄から鉄を造るには大量の木材が必要で、大きな森で木がどんどん伐られたと言う。

木地屋敷跡がある。遺跡が残っているわけでもなく、ただ屋敷が建てられていたと思しき空間があるだけである。ホオノキ、ブナ、トチなどの材を用いてお椀やお盆などの木製品を作っていたといい、大山寺にお詣りする人に製品を売っていたのかも知れない。木地師は定住せず木を伐りつくすと次の山に移動し、山の姿を変えてしまったといい、「トチル」という言葉の語源は、トチの木から来ていると言う。

サワグルミの巨木があり、佐野さんの指示で5人がかりで幹周りを測ると4.8mあり、幹には空洞が出来ているが、大きな枝を張り高く天空に伸びている。人間の胸の高さ、大樹の根元から1.3mの位置で測り3m以上あれば巨樹・巨木という。

大山古道は、平安時代に山岳仏教が栄えた頃の大山寺への参詣道で、一部石畳の道が残っている。江戸時代慶長年間、1600年ごろに附近の村人によって寄進により造成されたといい、一丁地蔵が建っている。昔は、参詣道の1丁毎に地蔵が建てられていたが、今は数少なくなってしまったと言う。

間伐材をチップにしたものが古道の一部に敷かれてあり、朽ちたチップにウリタケやナラタケが生えており、道端にはクリタケも見られた。

大山滝展望台に立つ。加勢蛇川の最上部は紅葉のビューポイントで、前方に県下最大の大山滝が見られ、落差は1段目が30m、2段目が5mあり、地獄谷から流れ落ちる水量は豊かで日本の滝100選に選定されており、秘境の名瀑と言われている。

昭和の初期までは3段の滝だったが、昭和9(1934)年の室戸台風で地獄谷が崩落して2段の滝になり、さらに平成23年の12号台風で滝壺に15mの土石流が埋まり、1.5段になったという。滝壺が見下ろせるという一段高い展望所に立つと滝壺が2つ見える。水温は11度でイワナが棲んでいると言う。

大山は、稜線が崩落して剣ヶ峰への縦走は禁止されており、2000年の鳥取県西部地震以降山肌の崩落が激しくなっていると、左手にまだ最近のものかと思われる大きな崩落跡があり、あちこちから滝のような水が流れ出ており、火山岩で崩落しやすく今にも崩れてくるのではないかと心配になる。

一向平に戻り昼食にする。大山おこわに手打ちそば、デザートにとち餅と品数は多かったが、大阪と違い時間がかかりイライラさせられた。

午後は、お天気も回復する。ブナ林が広がる鏡ヶ成大平原に一直線に延びる大山環状道路(国道45号線)を、貸切バスは鳥取花回廊に向かって突っ走る。

黄葉するブナのトンネルがつづき、木漏れ日に黄葉が照って美しい。14:30分、日本屈指の紅葉ポイントと言われる標高910mの鍵掛峠に到着する。

大山南壁は、大きなキレッドがあり、屏風のような崖が立ちはだかって荒々しく、大規模な崩落で出来た一ノ沢、二ノ沢、三ノ沢はダイナミックで、裾野に広がるブナ林は西日本屈指のブナの原生林といわれ、ブナやミズナラが混成して紅葉するロケーションは、大山一の見せ場であった。

大山の西部にある鳥取花回廊は、敷地50haの日本最大級のフラワーパークで、全長1kmの屋根付き回廊があり、雨の日でも花の観察が出来、高さ25mの回廊をぐるっと回ると園内の全体像が良く分かる。

回廊の真ん中にフラワードームがあり、南国の花やランの展示がしてあり、東西南北に小規模な展示館があって、東館には自生のササユリをはじめとするメインフラワーのユリが展示され、開花期は5~8月頃なのに花を付けたユリが多品種揃えられ、館内にユリの香りが漂い、大山山頂に自生する「県の木」ダイセンキャラボクも展示されている。

鳥取花回廊の花の丘には赤いセルビアが一面に植栽され、丘から眺める大山西麓は伯耆富士の名にふさわしく姿がよく、セルビアの赤と大山の初冠雪のコントラストが美しかった。

平成24年11月21日